或問　WAKUMON　91
No.27,（2015）pp.91-100

日本語心理動詞の深層格の複合性
――日英語の対照研究から見る共通性と特殊性

趙　仲

要旨：研究发现，日语动词的深层格并不只具有单一的含义，而是时常具有复合含义。本文通过研究发现，这种深层格的复合现象在日语的心理动词中尤为常见。因此，本文对日语心理动词的复合型深层格进行讨论后得出结论，多数日语心理动词都具有[对象+原因]或[对象+方向]的深层格含义。并且，通过与对应的英语表达的对照研究，可以发现，日语心理动词的复合型深层格从意义上来讲，与其他语言是有共通性的；从具体形式和语法功能上来讲，则具有日语的特殊性，需要特别注意。

日本語では、名詞が文中で述語（中心となるのは動詞）に対して特定の文法的関係を担っている。この関係を格と言う。その中、形としての格を表層格、意味としての格を深層格と言う（庵（2001））。また、人の感情・感覚・知覚・思考認識などの内的活動を表す動詞は心理動詞と呼ばれている。日本語心理動詞の格助詞の意味役割は「対象」か「原因」かに関する論争は未だに収まっていない。本稿としては、日本語心理動詞の深層格に着目して、例文分析することで、複合性を日本語心理動詞の深層格の一番重要な文法的特徴と見なすべきだと提案する。さらに、この深層格の複合性は、対応する英語の心理表現との間に見られる共通性と特殊性を考察する。

1　先行研究

仁田（1993）では、［主］［対象］［相方］［基因］［出どころ］［ゆく先］［ありか］［経過域］といった深層格は検討されている。

同書の山梨（1993）[1]では、これまでの深層格による格規定で問題になるのは、格の役割が一律に決定できない場合があることに注目し、伝統的な深層格の上に、新しい「認知格」を提出し、「いわゆる深層格のカテゴリーは、絶対的に境界をもった範疇として区分されるのではなく、典型的に具格、原因格、目標格等と解釈され、格の焦点（ないしはフォーカス）にあたる領域

[1] 山梨（1993）「格の複合スキーマモデル――格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」，仁田義雄（1993）『日本語の格をめぐって』，東京：ひつじ書房。

を中心として相互に部分的に関連しあっているものと考えられる。」と主張している。例えば、＜原因−場所格的＞、＜具格−場所格的＞、＜様態−結果格的＞、＜対象（刺激）−原因格的＞、＜目標−原因格的＞、＜結果−目標格的＞、＜動機−目標格的＞、＜目標−対象格的＞などである。

筆者の調べによると、上述した複合的な深層格や認知格の現象は、日本語の心理動詞において非常に多く存在している。むしろ心理動詞の深層格にとっての大多数の状態と扱うことができる。本稿は、このような心理動詞の複合的な深層格を考察することを目的とする。

これまでの心理動詞の格研究は、主に、原因か対象かという研究に集中されている。例えば、寺村（1982）は、動詞による感情表現は感情の動きの誘因を表す補語をとるタイプと、感情の向う対象を表す補語をとるタイプとがあると指摘している。影山（2003）では、「子供が物音に驚いた」という場合、「子供」が経験者、「物音」が原因であり、「子供たちはその話を｛怖がった/恐れた｝」の場合、目的語になる名詞は感情が向けられる対象そのものであることは指摘されている。

2 心理動詞の深層格の実態分析

上述した先行研究を見ると分かるが、深層格の複合性や心理動詞の格の意味役割が論じられてきたが、深層格の複合性を心理動詞の特徴的なものとして論じる研究は殆どない。そこで、本稿は心理動詞の深層格、特に複合的な深層格に対する考察を行う。

具体的には、国立国語研究所のデーターベース『少納言』を利用して、心理動詞の深層格実態をまとめる。例文を分析した結果、心理動詞の深層格は、＜対象＞、＜原因＞と＜ゆく先＞とがある。その中、＜対象＞は、心理活動の対象・内容を表すものである。＜原因＞は、心理活動を誘発する要素であり、原因・理由的なものである[2]。＜ゆく先＞は、心理活動の向く方向を表し、心理活動の着点を表す。この「ゆく先」は仁田（1993）の＜ゆく先＞を抽象化したものである。「ゆく先」は人である場合、仁田の「相方」とでも見られるが、方向性重視の視点で、「相方」ではなく、「ゆく先」として扱うことにしたわけである。

また、検討する時に、深層格は意味論的な分析で、言語形式としては、表層格が必要とされるので、ヲ格とニ格の使用に触れた。但し、ヲ格とニ格の選択と区別は、本稿では取り扱わない。

2.1 心理動詞の深層格の単独使用

まず、単独な深層格を持つ心理動詞の使用を簡単に見る。前節で述べたように、心理動詞が持つ単独な深層格は基本的に三種類がある。下記の三例は、それぞれ、＜対象＞、＜原因＞、

[2] 心理動詞の格を検討する時に、原因という術語が頻繁に用いられている。用語を統一させるため、仁田（1993）の「基因」ではなく、「原因」と称したわけである。

＜ゆく先＞の深層格を示している。

（1）自分のみならず、同僚、友人、先輩の行動を否定するのは、その人間性を疑う。（『ディベートからみた東京裁判』）
（2）業を煮やす腹立たしさに心がいらいらする。（『羅生門；鼻；芋粥』）
（3）同月 10 日の朝に供犠を行い，巡礼の成功を神に感謝する。（『文化人類学キーワード』）

例えば、例 1 の下線部「その人間性」は「疑う」という心理活動の具体的な内容を表す。つまり、動詞「疑う」が表す心理活動の及ぶ対象を示す。例 2 に関しては、「腹立たしさ」は「心がいらいらするようになる」誘因である。この場合、デ格との取り替えの可能性が考えられる。例 3 は、「感謝する」という心理的活動の具体的な内容は「巡礼の成功」である一方、感謝という気持ちは「神」に捧げたいという意味で、「神」は感謝の気持ちの向く方向を表す。いわば、感謝の気持ちの＜ゆく先＞は「神」にある。この＜ゆく先＞は、仁田（1993）で指摘した＜主や対象の目標や着点を表した項＞である。筆者の考えでは、この＜ゆく先＞には、物理的な空間概念と抽象的な状態概念とが含まれている。心理動詞の場合、抽象的な状態概念としての「ゆく先」を表す。つまり、心理活動の向く方向、あるいは、向けられた相手を、方向性を示す抽象的な＜ゆく先＞として捉える。

2.2　心理動詞の深層格の複合性

2.1 では、心理動詞の単独の深層格について考察してきた。面白いことに、心理動詞の前項名詞との意味関係は、単一的な深層格で解釈できる場合はあるが、単一の意味役割でうまく説明できない場合は非常に多い。つまり、一つの深層格として解釈すると物足りなくて、他の意味役割も入っているように思われるものがある。このような現象を心理動詞の持つ複合的な深層格として扱っている。

例文分析の結果、心理動詞の深層格の複合は＜対象＞＜原因＞＜ゆく先＞の中に発生するので、［対象＋原因］、［対象＋ゆく先］、［原因＋ゆく先］、［対象＋原因＋ゆく先］という組み合わせが考えられる。以下、それぞれの組み合わせの可能性について検討を加える。

2.2.1　【対象＋原因】

＜表層ヲ格＞

日本語において、ヲ格は対象を表すことはよく知られている。ところが、ヲ格は対象だけではなく、原因という意味役割を兼ねて果たしている場合がある。例 4、5 を参照されたい。

（4）「結婚しなかったせいで子供を持てなかったことを後悔している。」（『マルベリー作戦』）
（5）国際大会で初出場のケイリンで 3 位入賞したことを喜んだ。（『ＣＹＣＬＥ　ＳＰＯＲＴＳ』）

上例の心理動詞はヲ格を使って、他動性[3]を持っている。とはいえ、これらの心理動詞に見られる他動性は外的運動動詞と違ったところがある。例えば、「ご飯を食べる」は、「ご飯」は「食べる」動作の対象である。「食べる」と「ご飯」は文を構成する必須的な要素である。特殊な場合を除いて、対象語を省略して単なる「食べる/食べている」だけでは文が成立しにくいのである。それに対して、「そのことを後悔する」は、「そのこと」は「後悔」という心理活動の対象であるが、「そのこと」を除いて、単独に「後悔する/後悔している」と言っても構わないように思われる。なぜかというと、「そのこと」は「後悔する」の対象でもありながら、「具体内容」でもあるように読み取れるので、具体内容を省略しても、元の動作は成立できるからである。つまり、外的運動動詞の他動詞のヲ格前項名詞は純粋的対象を表すのに対して、心理動詞のヲ格前項名詞は内容的な対象であるということである。

では、この内容的な対象は何か特殊性を持つのか。例4'、5'を参照されたい。

(4')「結婚しなかったせいで子供を持てなかったので、後悔している。」
(5')「国際大会で初出場のケイリンで3位入賞したことで喜んだ。」

例4、5は、4'、5'のような「ので/で」文に書き換えられる。「で」、「ので/から」などの因果関係を表す表現との取り替えテストをすることで、原因的な意味があるかどうかを確かめる。つまり、原因的な表現に換えても、文の意味はほとんど変らないものを原因の意味役割が含まれると認める。そこで、「後悔する」「喜ぶ」は、ヲ格使用にも関わらず、前項名詞との関係には＜対象＞と同時に、＜原因＞の意味も含まれている。

＜表層ニ格＞

(6) 国民の圧倒的人気を持って誕生したマルルーニー政権も，深刻な支持率の低迷に悩んでいる。(『外交青書』)
(7) オリエンタルホテルも長期にわたり赤字経営に苦しむ。(『神戸』)
(8) 牧の荘の夕餉とほとんど変わらぬ献立にも、みなは喜ぶ。(『北国の雁』)

例6〜8では、心理動詞の前にニ格が用いられている。こういう場合、前項名詞が心理活動の原因を表すとされるのは多い。その証拠としては、ニ格が原因を表すデ格によって取り替えられることが挙げられる。ところが、これらの心理動詞の深層格は＜原因＞を表すと同時に、＜対象＞という意味役割も果たされていると考える。その証明にあたり、例9、10を参照されたい。

(9) ともに暮らす介護者にとっては，常に不機嫌で神経質な患者とどう接してよいかを悩む事

[3] 他動詞か自動詞かという二分法ではなく、他動性という素性を度合い的に見ることである。

が多い。（『介護保険実践ハンドブック』）

（10）肉体に対する気遣いからそうした欠如、あるいは何か別の、人間がその不運を苦しむようなことを悲しんだのではない。

例 9 と 10 は、例 6、7 と同じ心理動詞が用いられているが、形式としては、二点の相違がある。一つは、動詞の文中における位置と役割である。つまり、例 6、7 では、心理動詞が陳述文の文末に置かれ、文を終わらせる述語動詞として用いられるのに対して、例 9、10 では、心理動詞が文のある成分の構成要素として、連体修飾節や、中止形などに使われている。前者の場合、ニ格の使用がほとんどであるが、後者の場合、ヲ格の使用が前者より多く見られる。前に検討された深層格から分かるように、「ヲ」格が＜対象＞という深層格を表す典型的な標識であるので、「ヲ」格も使用されうることは、これらの心理動詞が前項名詞との意味的関係に＜対象＞という意味役割が多少入っていることを意味するのではないかと思われる。

先行研究では、デ格で取り替えられる場合のニ格は原因という意味役割を表し、その他は対象を表すというふうに、原因と対象を排他的に捉えられている。筆者の考えでは、そもそも、これらの動詞の深層格は、＜対象＞か＜原因＞といった単一の意味役割を担うのではなく、＜対象＋原因＞という複合的な深層格を持つのではないかと考える。

2.2.2　【対象＋ゆく先】

＜表層ニ格＞

（11）「君が会社を持ちこたえようと努力している様子が見えるようだ」庸助が珍しく柚子に同情する。（『彼女たちのオフィスで』）

（12）日本に住む日本人以上に「日本的なもの」に憧れる。（『W 文学の世紀へ』）

上述の 2 例は、通常ニ格が精神活動の及ぶ対象を表すと扱われている。特徴としては、前によくヒトが直接的に接続されることである。山岡（2000）では、このような表現は対人的情意表明と呼ばれている。本研究ではこのような対象を表す意味的関係を認めている。但し、それだけではなく、＜ゆく先＞という意味役割も含まれていることを提唱する。具体的には、「柚子」は「同情する」という心理活動の対象であることは間違いない。が、それと同時に、「柚子」は「同情」という気持ちの向く方向であり、向けられる対象であるので、＜対象＞に加え、＜ゆく先＞という意味役割も含まれている。同じように、「日本的なもの」は「憧れる」という心理活動の内容的な対象を表している。それと同時に、「日本的なもの」は「憧れ」という気持ちの向く方向を示し、感情の向けられる対象である。いわゆる、＜対象＋ゆく先＞である。つまり、「柚子に同情する」は「柚子に向かって同情の気持ちを投げる」、「日本的なものに憧れる」は「日本的なものに向かって憧れの気持ちを抱く」というふうに理解しても差し支えないのであ

る。

＜表層ヲ格＞

(13) なんで自分まで肩身の狭い思いをしなければいけないのかと相手を恨む。(『女が30代にやっておきたいこと』)

(14)「まめなれど」の歌も知らない女房たちを軽蔑している。(『新編日本古典文学全集』)

例13、14の示す心理動詞は、表層ヲ格を使って、＜対象＋ゆく先＞という複合的な深層格を持っている。これらの心理動詞は例11、12と同じように、山岡(2000)で、対人的情意表明として扱われている。具体的には、例13の「相手」は当然「恨む」という心理活動の対象である。それと同時に、「恨み」という感情の向く方向を示し、感情の向けられる着点でもある。例14も同じように、「女房たち」は「軽蔑する」という感情的心理活動の感情の向く方向を示し、感情の向けられる対象である。つまり、意味的には、「相手を恨む」は、「相手に向かって恨みを投げ出す」と、「女房たちを軽蔑する」は「女房たちに向かって軽蔑する気持ちを投げ出す」と理解しても差し支えないと思われる。

これに関して、山川(2004)の「感情の対象」には、「なんらかの「方向づけ」的な概念を表示できる方が望ましいのではないかp.7」との指摘に一致性が見つかる。

2.2.3 【原因＋ゆく先】【対象＋原因＋ゆく先】

上述した複合型の他、組み合わせの理論から言うと、＜原因＋ゆく先＞もあるはずである。ところが、例文を検討した結果、＜原因＋ゆく先＞という複合の仕方が無いようである。なぜかというと、＜原因＞は、基因とも言われるように、物事を誘発する役割を担い、起点、出どころの意味合いがある一方、＜ゆく先＞は、動作や状態が向く方向を示し、向けられる方を表し、着点の意味合いがある。そこで、＜起点＋到達点＞、＜出どころ＋ゆく先＞という組み合わせが想像しにくいように、＜原因＋ゆく先＞という組み合わせも成り立ちにくいのである。

その上、＜対象＞の意味を加えた＜対象＋原因＋ゆく先＞といった三つの要素の深層格の複合は更に考えられないのである。

3 英語の視点から見る心理表現の深層格の複合性

さらに、心理動詞が複合的な深層格をたくさん持つ意味的論理性を見てみる。複合的な深層格を持つというのは、一つの成分から複数の意味的解釈が読み取れるということである。具体例を見ながら、この意味的論理性を説明する。

心理動詞「後悔する」は、「何かをした、あるいは、していなかったあとになって悔やむこと」を表す。例えば、「大学に行かなかったことを後悔する」という表現においては、「大学に行か

なかったこと」は「後悔」という心理活動の具体的な内容を示す、つまり、「何を後悔する」ことを表す。それと同時に、「大学に行かなかったことで、今は後悔している」ことを表すこともでき、「何で後悔する」という原因の意味も帯びている。つまり、「後悔する」という心理動詞にとっては、前項名詞が表す内容は、「後悔する」の内容対象でも原因でもある。いわゆる「対象、即ち、原因」という意味的論理性である。

また、「恨む」が＜対象＞という深層格を持つことは従来から認められている。ところが、「恨む」の前項名詞はヒトであることが一般的に見られるが、そのヒトは「恨み」という感情の投げ出された対象であり、感情の向く方にある対象である。つまり、＜対象＞の他に、＜ゆく先＞も表されるのである。要するに、「恨む」のような心理動詞にとっては、恨む対象は恨みのゆく先でもあると考えられ、「対象、即ち、ゆく先」である。

つまり、人の内的活動を表すので、特に感情的な心理活動を表す場合、感情の対象は、純粋な対象を表すのではなく、「原因」や「ゆく先」という意味役割も同時に持たれている心理動詞はたくさんあるということである。

3.1　日英語の心理表現対照

また、言語形式から見ると、世界の言語はそれぞれの形を持ち、異なる言語になっているが、意味的論理性はロジック的なもので、人の思考の規律を反映しているものなので、言語形式に委ねない、共通した論理性を持つはずである。

そこで、簡単でありながら、上記した日本語心理動詞に対応する英語の心理表現を見てみる。

上記した日本語の心理動詞に対訳する英語の心理表現は、大体、[動詞＋補語]と[動詞/形容詞/動詞−名詞フレーズ＋介詞＋補語]とがある。基本的に、[動詞＋補語]の場合、英語の特徴に従い、動詞の補語との意味関係は「動作—対象」となる一方、[動詞/形容詞/動詞−名詞フレーズ＋介詞＋補語]の場合、動詞が補語との意味関係は介詞マーカーによって判断される。

まずは、前節で見てきた＜対象＋原因＞のところで挙げられた心理動詞に対応する英語の表現を見て行く。

表 1

日本語	英語	
後悔する	regret doing/that; be sorry that	be sorry about/for/
喜ぶ	be glad/pleased to do	be glad about/of; be pleased at/with
悩む	—	be worried about; be distressed by
苦しむ	—	suffer from

表 1 から分かるが、四つの心理動詞は、補語を接続する時に、介詞の要らない場合と要る場

合がある。「後悔する」「喜ぶ」は、対応する英語の表現に介詞が要らない表現があるので、前述のように、この場合、補語との意味関係は「動作—対象」であると言える。一方、介詞のある場合、介詞の文法機能に従って意味関係を判断することは大切である。上記の表に現れた「about」「of」「with」は、「～について/に関して」の意味を表し、「対象」を表す。また、上表の「for」は、「because」と同じ役割で、「原因」を表す。これと同じように、「at」も「原因」を提示する。さらに、「by」は、受動的な意味を表し、補語は心理活動を誘発する「原因」を表すのは一般的に理解される。「from」は、起点を提示して、「原因」を表すものと見られる。

上記した説明に合わせて、対応する英語表現の補語との意味関係は以下のようになる。「苦しむ」に対応する英語表現の深層格は、原因しか読み取れないのに対して、他の三語は全部 ＜対象＋原因＞であり、日本語の心理動詞表現との一致性が高い。

続きまして、＜対象＋ゆく先＞という複合的深層格を持つ日本語心理動詞に対応する英語表現を見て行く。

表 2

日本語	英語	
同情する	—	sympathize with; Have compassion on
憧れる	long to do	long for; has a long for; have a crush on
恨む	blame	have a grudge against
軽蔑する	despise	look down on

前の分析と同じように、介詞が要らない表現では、英語の場合、心理表現が補語との意味関係は「動作—対象」であり、いわば「対象」を表す。介詞の付いた場合を分析すると、まず、前述に触れたように「with」は、「～について/に関して」という意味で「対象」を表す。その他、「on」は、方向を示し、着点を表す意味で、「行く先」を表す。さらに、表 1 の「for」が「原因」を表すと異なり、表 2 の「for」は、「方向や指向性ありの態度」を表す。つまり、「方向」を示す場合、向く方向を示し、「指向性ありの態度」を表す場合、「賛成/反対」や「ほしい」などの方向的指向性を帯びる態度を表す。どちらも「ゆく先」を表すと言える。さらに、「against」は、「指向性ありの態度」に近い、「ゆく先」を表す。

よって、表 2 の示した英語表現の補語との意味関係は全部、＜対象＋ゆく先＞であることが分かる。つまり、対応する日本語の場合と一致している。

3.2 深層格の複合性における日英語の共通性とゆれ

前節では、日本語心理動詞の複合的な深層格に対応する英語の心理表現を簡単に見てきた。その結果、英語と日本語の間に、共通した論理性はかなり存在していることが分かる。なぜかというと、深層格は、動作や事物に起きる論理的な関係を表すので、ロジック的な合理性が求

められる。この論理性は言語形式を超えた存在であるので、どの言語においても存在するはずである。

ところが、諸言語の特徴により、同じ論理性は、異なる言語において表現は異なる。例えば、英語の場合、名詞と動詞に見られる複合的な意味関係は、異なる言語形式によって、読み取れる。例えば、「be sorry about」は、「後悔する」の＜対象＞意味役割が読み取れるが、「be sorry for」は、＜原因＞の意味役割が読み取れる。つまり、「be sorry」が関連名詞との意味役割は、異なる表現によって、原因と対象とがあることが分かる。それに対して、日本語の場合、同一言語形式によって、複合的深層格を表す。例えば、「～を後悔する」は、ヲ格の前項名詞が「後悔する」という動詞との意味関係が＜対象＞の意味もあるが、＜原因＞の意味もあり得るのである。言語形式に頼っての意味・機能の分別はより簡単であるが、言語形式によって意味分別のできない言語は、捕まえ難いと考えられる。そこで、日英語の心理表現が複合的な深層格を有する共通性を持つ中、日本語心理動詞の格性質は、さらに複雑であり、注意すべきである。

4　まとめ

本稿では、日本語心理動詞の深層格、特に、複合的な深層格について、検討が行われてきた。その結果、日本語心理動詞の深層格は、＜対象＞＜原因＞＜ゆく先＞といった単一的な深層格と＜対象＋原因＞＜対象＋ゆく先＞といった複合的な深層格があることが得られた。これは、日本語において心理動詞が他の動詞類と区別する一つの特徴だと見られる。

また、深層格は、動詞と補語との意味関係を表すので、言語形式を超える意味的論理性があるものである。そこで、他の言語においても、共通したロジック的な論理性を有するはずである。そこで、日本語心理動詞に対応する英語の心理表現に考察を加えた。その結果、英語と日本語の間、少数のところでゆれが生じる他、基本的に複合的な意味組み合わせは共通している。また、その中、英語に見られる複合的な深層格は、異なる言語形式によって表されるのに対して、日本語心理動詞の複合的な深層格は、同じ言語形式によって担わされる。それゆえ、日本語心理動詞の格性質は、複雑であり、注意すべきであることを提唱する。

参考文献

Michiko Bando、(1996)「Semantic Properties of –Ni NP and –O NP of Japanese Psych-verbs」『大阪大学言語文化学』vol. 5, pp. 165-177.

庵功雄（2001）『新しい日本語学入門：ことばのしくみを考える』，東京：スリーエーネットワ

ーク.

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト−現代日本語の時間の表現−』，東京：ひつじ書房.

佐藤響子（1997）「ニ格名詞句をとる心理動詞」『横浜市立大学論叢人文科学系列』vol. 48, pp. 117-138.

鈴木重幸（1983）『日本語文法：連語論』，東京：むぎ書房.

高橋太郎（2003）『動詞九章』，東京：ひつじ書房.

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』，東京：くろしお出版.

仁田義雄（1993）『日本語の格をめぐって』，東京：ひつじ書房.

仁田義雄（2010）『語彙論的統語論の観点から』，東京：ひつじ書房.

松野美海（2010）「ヲ/ニ格両用型感情動詞の諸特徴について」『名古屋大学国語国文学』vol. 103, pp. 228-214.

山岡政紀（2000）『日本語の述語と文機能』，東京：明治書院.

吉永尚（2008）『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』，大阪：和泉書院.